健康づくり講演会の講演から

歩いて楽しいまち

歴史にふれる京都の道

京都橘大学　学長

田端　泰子　氏

【プロフィール】

昭和 16 年　　生まれ
昭和 39 年　　京都大学文学部卒業
昭和 44 年　　京都大学大学院文学研究科博士課程国史学専攻
平成 元 年　　文学博士（論文）

【現職】

京都橘大学学長　文学部歴史学科教授

【専門分野】

史学　日本史　日本中世史　日本女性史

【研究の概要】

研究課題１　　中世後期の村落構造に関する研究（惣結合、住民、領主）
研究課題２　　中世における女性の地位と役割（相続、役割分担、ジェンダー）

【所属学会】

日本史研究会　歴史学研究会　女性史総合研究会
比較家族史学会　史学会　史学研究会

【最近の著書】

『京の鴨川と橋―その歴史と生活―』／「橋と寺社・関所の修造事業」「コラム②桂川用水と村々のつながり」（共著：思文閣出版）2001 年 7 月
『日本の中世４　女人、老人、子ども』／「女性、子ども、老人にとっての『家』」など１、３、５、９章（共著：中央公論新社）2002 年 6 月
『京都の女性史』／「戦国期の『家』と女性―細川ガラシャの役割」（共著：思文閣出版）2002 年 10 月
『天下人の時代―16～17 世紀の京都』／「北政所と淀殿」（単著：平凡社）2003 年 3 月
『幕府を背負った尼御台　北条政子』／（単著：人文書院）2003 年 10 月
『戦国の女たちを歩く』／（単著：山と渓谷社）2004 年 7 月
『母乳の力―歴史を支えた女たち』／（単著：吉川弘文社）2005 年 8 月
『山内一豊と千代―戦国武士の家族像』／（単著：岩波書店）2005 年 10 月
『北政所おね　大坂のことは、ことの葉もなし』／（単著：ミネルヴァ書房）2007 年 8 月

ごあいさつ

こんにちは。今日は「歩いて楽しいまち」というお話ですので、私も雨が降っても雪が降っても歩いて来なければと思っていたんですが、大変いいお天気に恵まれました。そして、バスに乗りましたのでそんなにたくさんは歩いてはいないのですけれども、楽しく歩いてくることができて喜んでおります。

今日は健康面から見たお話とはちょっと違いまして、歴史の話になりますが、１時間ほどさせていただきたいと思います。

その理由は、私の専門が歴史学だということもあり、また長らく、大学の頃から京都に住んでおりまして、京都の町というのが大変いい町で、健康にもいい町なんじゃないかなと思っているからでございます。

宮から京（みやこ）へ

古代の宮

それでは、京都の町というのはどのようにしてできたのかということをまずお話ししていきたいと思います。

京都は京（みやこ）と言われるのですが、実は京という呼び名は奈良のほうにあります藤原京のあたりからできてきました。それ以前は京という言葉はありませんで、宮（みや）という言葉があったんですね。宮という名称がもともとありまして、その後、京と書いて（みやこ）という名称になりました。

古い時代の宮というのは幾つか皆さんもご存じの名前があると思いますけれども、飛鳥板葺宮という、板葺とついたなかなか庶民的な名前の宮があります。これは皇極天皇という女性の天皇が住んでいたことから飛鳥板葺宮と呼ばれています。なぜこんな庶民的な板葺という名前がついたのかいろいろ謎はあります。けれども、それまで茅葺きだとか、藁葺きという邸宅から、屋根を板で葺くようになったからこういう名前がついたんだという説が割と一般的になされております。

飛鳥浄御原宮というところは、天武天皇や持統天皇が住んでいたところでございます。期間的には２２～２３年、つまり飛鳥板葺宮も飛鳥浄御原宮も飛鳥にあったということなんですね。

それから、大きな宮というのは姿を消しまして、もうちょっと小さな単位の紫香楽宮などいろんな宮がつくられます。これは聖武天皇の離宮ですが、離宮というのは本当に京的な機能を持っているわけではないんですね。紫香楽と書きますけれども、今の信楽のことで、滋賀県の信楽町にあった宮殿跡ということです。聖武天皇は恭仁京というところに住んでいたのですけれども、風光明媚なところであります紫香楽宮を自分の離宮として使っ

ていて、しばしば行幸するのでした。

京（みやこ）の登場

その後、この時代あたりから京（みやこ）という名称が登場いたします。最初に大きな京（みやこ）としてできたのは藤原京でして、持統天皇、文武天皇、元明天皇という三代の天皇が京をつくりました。西暦で言いますと６９４年から７１０年までですので、１５～１６年あったわけです。ところがその後、７１０年に今の奈良のほうですけれども、平城京へ移りました。それからしばらくして平安京へ移るんですけれども、平安京へ来るまでに長岡京という、京都府の長岡京市のところに一時移り、それから年号の覚え方でも有名な「鳴くようぐいす平安京」とありますように、７９４年に平安京に京が移ったわけでございます。

宮ではなくて京と呼ばれた時代になりますと、やはり京に住む人たちも随分増えてまいりました。平城京の人口は大体１０万人ぐらいだっただろうと言われております。それに対して平安京のほうは、長岡京を経て移ってきたわけですけれども、最初は１０万人から１５万人ぐらいだったと言われておりまして、平城京よりもさらに大きくなったということです。

考古学での発掘調査などを見てみますと、京が移るときに古い建物を全部捨てて移るのではなくて、古い建物の資材などを新しいところへ持って来て、再利用しているということがわかるようです。難波宮で使用していた瓦を平城京や長岡京へ運び使用し、またさらに平安京でも使用していることが、瓦の様式などを調査してわかりました。だから昔から貴重なものは、木材などに関しても、リサイクルしながら使っていたのだなということがわかるわけです。

では、宮も京も似たような名前を持っているんですけれども、どちらもやはり首都でありまして、日本という国のその当時の中心なわけです。首都というのは政治と経済の中心地という意味で言いますと、宮も京も政治や経済の中心地であったことには変わりありません。古代には天皇のいるところ、つまり宮が首都であったという関係になります。天皇がいるところが首都である、天皇の居所を中心にして首都という考え方が後からついてくるという考え方です。ところが、このように天皇の代ごとにくるくる宮が変わると非常に不経済です。なぜなら新しい宮をつくるには非常に費用も人手も必要としたからです。

一方、日本の外側を見てまいりますと、中国では首都として大きな京がつくられていました。隋や唐ではものすごく立派な、世界に誇るような大きな京がつくられていました。海外の状況と国内の状況の２つが合わさりまして、宮から京へ、恒久的な京の建設へと変化したのだと思います。

平安京の造営

平安京条坊図

それでは、京都の地につくられた平安京はどんなものだったのかということで、別添の図をちょっとごらんくださいませ。

まずこの図の説明をいたしますと、矢印を書いておきましたけど、左の平安京条坊図の上のほうの中心部分、大内裏(だいり)のところへ平安京大内裏図という真ん中の図が入ります。そして、真ん中の内裏という少し色がついているところへ、右側の平安京内裏図というのが入るという形です。ロシアの人形にペトルーシカというのがありますよね。大きな人形の中に中ぐらいのものが入っていて、中ぐらいの人形の中にまた小さいのが入っている、そういう感じで見ていただければいいと思います。これら３枚の図を１枚で表しますと、ものすごく大きくなってしまうので、歴史学ではこんな形でやっております。

一番左の大きな平安京条坊図では皆さんも通りの名前を知っていると思われるように、大内裏の南側に朱雀門という大きな道路が南のほうへ走っておりまして、その一番南に羅城門というのがあるんですね。芥川の『羅城門』の門の上に老婆が住んでいたという話につながるような大きな門があったわけなんですが、そして九条、八条、七条、六条、五条、四条、三条、二条、一条というように条と坊が平安時代につくられます。この３つの図は平安時代の後期の京都の様子を示しております。ぱっと見ていただきますと、条と条の間はかなり均等なんですけど、上のほうへ行きますと、一条大路と二条大路の間はだいぶ空いているのがおわかりだと思います。したがって、京をつくったときにはちょうど九条までということではなくて、九．五条の条坊をつくったということです。

それに対して縦の通りは、右の東から、東京極大路、その次の大きな通りが東洞院大路です。今はそんなに大きくないのですけれども、平安時代では東洞院は大路で、烏丸、室町、町尻というのは小路、そして西洞院は大路だったんですね。それから大路は大宮、壬生、朱雀、それから皇嘉門というふうに続くわけですが、どうもこの図を見てお感じになるのは、賀茂川が一番右にあって、加茂川より西のほうに京ができているということがわかります。そして真ん中の図の大内裏をごらんいただきますと、いろんな役所が、大蔵というのは近年まで大蔵省という役所がありましたように、大蔵省だとか、左馬寮、右馬寮という馬を飼っている馬寮ですね。さまざまな役所があります。そういうものがこの図の中に描かれておりますが、ちょっと注目したいのは、真ん中の図の右上に茶園というのがあることです。左上には漆室という漆を保存しておくところがあるというように、地方からいろんなものが来ても自給自足的生活が基本の時代ですので、やっぱり大事なものは大内裏の中でも作らなければいけなかったわけですね。真ん中の図の右上に茶園があって、図の中央から少し左下へ行きますと典薬寮というのがありまして、ここが天皇などが病気になりましたときに薬を調合する役所です。そして図の真ん中に内裏がありまして、その

中で天皇は紫宸殿や仁寿殿などに住んでいたわけです。

平安時代のお茶

ここでお茶のことについてちょっと触れておきますと、先ほど申しましたように、内裏図は平安時代後期の資料ですので、平安時代後期には大内裏に茶園があったということがわかります。ところが、私が高等学校のとき習った教科書には、お茶は鎌倉時代に栄西というお坊さんがお茶の種子を日本にもたらして、まず九州にそれを植えたのだということが載っておりました。それを習ってきたものですから、大学に入ってこういう図を見て、おかしいなあ、平安時代の後期に何で茶園があるんだろうと非常に不思議に思ったんですね。

調べていきますと、栄西が鎌倉時代に持って来たお茶は、その後各地で広まりまして、京都でも山城の栂尾なんかでも植えられ、それからずっと南へ下がって醍醐や宇治に広がり、また全国に広がっていきました。それは嗜好品として、飲むためのお茶だったんですね。それより前の平安時代にお茶は伝わっていたので、教科書の「初めて伝わった」というのは間違いで、８０５年という９世紀の初めに、天台宗の開祖である最澄が日本にもたらしまして、京の周辺でお茶の栽培を始めた。これがどうも起源らしいんですね。その９世紀に最澄がもたらしたお茶は嗜好品ではなくて、貴重なものですから、主に薬としてお茶は飲まれていました。今でもメタボなんかにお茶は効くんじゃないかという考え方もあるように、最初は薬として珍重されていましたので、大内裏の図の中にも茶園があることは、そう考えれば納得できるわけです。その後、鎌倉時代に栄西がお茶の種を持って来たことによって一般にずっと広まって、お茶の栽培が日本で盛んになったということなのではないかと思っております。

地形的条件

平安京の造営はこのようになされてきましたが、条坊図をごらんいただくと、先ほど申しましたように、鴨川から西のほうに京がつくられておりますね。京都の地形は東・北のほうが高くて、南・西に行くと低くなっているということです。また、今はあまり町の中には川がないのですけれども、室町・戦国時代の絵図などを見ていますと室町通にも川があったし、西洞院にも川があったし、小川という地名もありますように小さな川がたくさん京都の町の中には流れていたようです。その川ではいろんな生活用水を流したり、洗濯をしたりと、今とだいぶ状況が違うわけですね。その川も南・西へ向いて流れておりますので、実は平安京ができた後、西のほうは低湿地として人が住むにはあまり適さない土地になってまいります。そのため、しばらくしますと西のほうは田んぼや畑へ変わっていったのです。

西のほうにあまり人が住まなくなると、京は鴨川を越えて東山のほうへどんどんと広がっていきました。山の麓にはお寺がつくられ、そして貴族の邸宅などもぼちぼちとつくられるようになりました。

それから、もう一度、条坊図を眺めていただきますと、斜線が引いてある四角形があると思います。これは大きなお屋敷があったことがはっきりとわかるところなんです。天皇は大内裏のさらに中の内裏に住んでいますけれども、親王は同じところに長いこと住むわけにはいきません。そういうことで大内裏の外のところに屋敷を設けざるを得ないとなり、大内裏の周辺に屋敷地をもらって、冷泉院や高陽院などの斜線のところに住むようになるわけです。つまり大きなお屋敷というのは、親王が住んでいたお屋敷なのです。しばらくしますと、そういう屋敷は摂関を務める藤原氏がもらい受けまして、立派に増築したり改築したりして、藤原道長だとか頼通だとかの所有地になります。そして藤原摂関家の屋敷というのが大内裏の特に東側のほう、鴨川までの間にたくさんつくられたのです。

平安京に住んだ人々

次に平安京に住んだ人々について話してまいりたいと思います。平安京にどんな人が住んでいたかといいますと、もちろん天皇の宮としての機能を持っておりますから天皇家が住んでいます。天皇家は大内裏の中のさらに奥まった内裏に住んでいたわけですが、周りに役人たちが住むようになるわけです。特に、役人たちはなるべくお勤めに近いようにと、大内裏のわりあい近くに屋敷を構えました。したがって、この図から見ると載っていないですが、紫式部の屋敷が今の御所の近くにあったということは大内裏の近くだったからなのです。今の御所は、平安京条坊図の右上、点線で囲まれているところにあります。だから、天皇のすみかが平安時代は内裏だったのですけれども、後々になりまして別のところに移っているということがわかります。それから、天皇の臣下である公家たちも内裏の周辺、特に東側に邸宅をつくりました。その中でも藤原氏などは摂政関白を務めますので、琵琶殿だとか、東三条殿だとか、もともとは親王の屋敷だったところをもらい受けていたので、たくさん屋敷を京中に持っていたことになります。

それからお寺や神社がたくさんできます。それは主に条坊図の北のほうに載っていますように、有名なお寺や神社がこの条坊の北、東、西、南につくられるようになります。北のほうをこの図で見てみますと、一番右のほうに賀茂御祖神社というのがあります。これは上賀茂神社のことです。それから相国寺、持明院、釈迦堂、北野神社、平野神社、等持院、竜安寺、仁和寺など、この条坊図の中心からは外れていて、現在ではかなり人家が混み合っているところもありますが、当時は静かな田園や山の中に建てられました。

続いて室町時代になりますと、非常に庶民の活動が盛んになってまいります。そして、平安時代は条坊図にみえるように朱雀大路というのが一番の中心街だったのですけど、室町時代はちょっと外れ、室町通が中心になったのです。室町通が栄えたことで室町時代と

いう時代名が後についたのですけれども、室町通というのは条坊図で見ていただきますと、烏丸通の西に室町小路としてあった小さな道だったんです。ところが、この室町通に面しまして北のほうに、足利幕府の花御所という足利家の邸宅ができます。それで室町通というのは室町時代以降、中心街になるわけです。室町通に将軍の邸宅の西側が面していて、その室町通を南へずっと下がっていきますと、三条、四条、五条、六条、七条と、お商売をしている家がぎっしりと並んでいるという状況でした。今は烏丸通のほうがずっと道幅も広くて大きいのですけれども、室町通は室町時代以降一番の中心となったのでした。室町時代の繁華街というのは室町通、それから横の三条、四条、五条、七条だったのです。そこには都市の住民たちが営む塩屋、材木屋、飴屋、屋根葺き職人などの家が連なり、大変にぎやかに人々が集住するようになってまいりました。

天皇や、公家や、一般庶民がまず京都に住宅を構えるわけです。おくれて武士が鎌倉時代、正確には鎌倉時代のちょっと前の平氏の時代から京都に住み始めます。平清盛などは京都に邸宅を構えまして、そして六波羅を拠点にしまして平氏政権をつくりました。また、その六波羅という土地は後の鎌倉時代も武家政権の拠点になるということで、平清盛が仏像を安置した三十三間堂などは今でも非常に立派なものだと感心します。つまり武士は、公家や天皇、それから一般庶民よりもちょっと遅れて京都に住むようになったと言えるのです。

平安京の変貌

火災

それでは、そんな平安京が変貌していくのはどうしてなのでしょう。

まず、大きな理由は火災が平安京で何回も起こったということです。火災と言いましても、どれぐらいの頻度で起こったのか、記録に残っているものしか辿れないのですけれども、例えば天皇が住んでいる内裏。ここは火災が起こったら最も困るところなんですけれども、本当によく火災が起こりました。９６０年に大火が起こって、だいぶ焼けたのですけれども、それから何と９６０年から１５回も天皇の住んでいる内裏が焼けてしまいました。そのたびに再建を心がけましたが、それだけ焼けるとなかなか大変だということで、最終的には再建をやめてしまいます。ところで火災が内裏で起こりますと、まず天皇はどうしたかということです。もちろん今と同じように逃げるわけです。そして女房たちが三種の神器などを抱えて走って内裏の外へ逃げていきます。

そしてその日はどこで寝るかということが大変な問題になってきます。そのときに行ったのが、親王が建てた邸宅を自分のものとして持っていた藤原氏のところへ主に逃げていきます。天皇に来てもらっても構わないというほど大きな邸宅で、もともと親王のものということもあり、貴族や公家、特に藤原氏の邸宅に逃げていくわけです。内裏は焼けてし

まっており、仮の内裏ということで藤原道長や頼道の邸宅は里内裏（さとだいり）と呼ばれております。

内裏が再建されますと、そこへまた帰っていくわけなんですけれども、何回も何回も余りにも火災が頻繁に起こりまして、その間に内裏は荒廃していきます。藤原道長の日記に書いてあるような、内裏が大変荒れ果てていて狐のすみかになっているとか、犬のすみかになっているとか、夜になると非常に恐ろしいので肝試しに公家が内裏へ入っていくという状況になってまいります。そのため鎌倉時代になりますと、平安時代の内裏はもう使われなくなり、大きな野原になったと次の時代には書かれるようになります。それで、里内裏の延長としまして天皇は、大内裏よりも規模はだいぶ小さいですが、今もあります御所のほうへ最終的に移っていったのです。

応仁の乱

それから、内裏だけではなくて、京都の京（みやこ）自体が大変な被害を受けたのが１４６７年に始まり文明５年ぐらいまで続いた応仁の乱で、皆様もよくご承知のように、「ヒバリは上がるけれども、落ちるのは涙ばかりだ」という歌がつくられたりしまして、上御霊社という同志社の近くで始まった戦乱がずっと広がっていきまして、全国的な争乱になり、京都の町も本当に多くが焼けてしまいました。そこから京の姿はだいぶ変わります。

織田信長と足利義昭

それからもう１つ、織田信長の時代にやっぱり上京と郊外とが焼き討ちをされるという大きな火災が起こっているのです。信長は足利義昭という将軍を担いで京都に入ってきて、初めは仲がよかったんですけれども、だんだんと足利将軍家と袂を分かつようになりました。そしてそのときに、ずっと京都に住んでいた将軍家ですから、足利将軍家に心情的に近いものがあるといって、上京の町を焼いてしまうわけです。そういう事件があって、上京や郊外の静原などいろんなところが被害を受けた事件がありました。そのときは京都の町衆の力や、その後信長も悔い改めて、幾らか援助をしまして復興しました。

秀吉の改造

それから、秀吉の改造で大きく変わりました。秀吉はもとの平安京の条坊、何条何坊というのを参考にしました。道に面していたほうがお商売は楽ですので、一般の人たちは、大きな条坊の中で道に面したところにずっと家を建てて、後ろの空間は共同の土地として共同井戸、共同便所、洗濯場などを設け使っていたのです。けれども、余りに広いですので、１つの四角の条坊の中に縦横に道が自然発生的にできてきました。その小さい道などを認めながら秀吉はさらに京都の町並みを改造していくわけです。聚楽邸という、秀吉や

おねの住んでいた大きな屋敷を上京のほうにつくったのですけれども、平安京の時代の条坊の四角の中に小さい道をつくることを意識的にやりました。そうしますと、道に面した家ができるわけですから、大変便利になってくるわけですね。このような改造を秀吉はだいぶ行ったようです。

京の道

大交通路

そして、いよいよ道の話になってくるのですが、秀吉の改造もあり、京都の道が大きな道だけではなくて、小さい道もかなりできたということを想像していただけると思います。それでは京の道とはどういうものでしょう。まず、大きな交通路があります。太い幹線道路ですね。大交通路が京都を通っておりまして、一番古いのは山城道（やましろみち）と言います。山城道というのは旧奈良街道に当たりますが、京都の東、山科のほうをずっと通って南のほうへ続いている道です。

なぜ山城道と言うかというと、藤原京や平城京などの時代には京（みやこ）が南の奈良のほうにあったからです。山城、つまり京都のほうが田舎で、南にある京から山城へ行く道ということで旧奈良街道は、山城道という名前がついております。それからまた東海道や山陰道ができるというように、大きな道が京都を中心に整備されるようになりました。

みやこの大路・小路、当時の商人

それから、京の中の三条、四条、室町通などの大路、そして小路には非常に人口が増えまして、生活が多様になってまいりました。公家、天皇家、それから武士は自分でお米を作ったりせず、京都の町の中で売っているものを買うという消費階級です。そういうことで京ができてから、お商売というのが京都の中で成り立つようになったのです。

その商売をやっている人について少しここで考えてみますと、もちろん大きな道に面した家、小さい道に面した家は外に店棚を構えて、どんなものを売っているか、例えば紙を売っていたり、扇を売っていたりと、何が売られる店かはよくわかりますよね。

そういう店棚を構えている商人のほかに、振り売りという商人がいたのです。それは朝荷物を担いで近郷の農村から出てきて物を売って、夜になると自分の家に必要なものを買って帰るという商人で、当時数多くおりまして、その代表が大原女です。なかなか重たいのですけれども、大原から日常生活に必要な薪や炭それから柴を頭の上に載せて、京都市中を売り歩いておりました。

そういう人たちの姿が絵巻物なんかでよく残っているのですけれども、一番振るっているのは、竹売りという竹を売っている振り売り、板売りという板を売っている振り売りの

商人なんです。竹はしなりますし、板は真っ直ぐなので、売るのはどうやっていたのでしょう。また、もちろん車なんかありませんし、馬を買える人は相当経済力がある人ですので、馬を持たないで、人力で竹や板を販売するのにはどうしたらよいかという質問になりますよね。その当時の人たちもいろいろ考えまして、竹はしなりますので、竹を両端２ヶ所で結わえるわけです。ほうっておくと真っ直ぐになりますけれども、２ヶ所を結わえると楕円形みたいな形のものができまして、その間に首を入れて売り歩くんです。それから、板のほうは１ヵ所で結わえ、今度は結わえたところに別の板をかけて交差したところに首をかけ、後ろがとがっている状態になります。板は真っ直ぐしかならないので、もう１つ板を置いて、釘か何かでとめてここに首を入れるというううまく発明、工夫をされた形で売っております。非常にユニークな形なので、また絵巻物など見られたら、そういう人が町の中に歩いている様子のものもありますので、ごらんになっていただきたいと思います。このように、店を構えている人もいれば、板なんかは山国とかそういうところから持って来るんですけれども、最近まで「畑の姥」という方が小形の梯子を売っていたように、非常に振り売りの商人というのも多いのです。振り売りというのは売り歩くという意味ですけれども、店を構えた商人と振り売りの商人と、そういう２種類の人たちがいたということがわかったと思います。そこで、そのことが実は京都の通りの呼び名とかかわっているんじゃないかと私は思うわけです。

振り売りと手まり歌（丸竹夷）

皆さんもご存じだと思いますけれども、私たちも、まるたけえびすにおしおいけ（丸竹夷二押御池）というように暗記しましたね。あねさんろっかくたこにしき（姉三六角蛸錦）、しあやぶったかまつまんごじょう（四綾仏高松万五条）、せきだちゃらちゃらうおのたな（雪駄ちゃらちゃら魚の棚）。せきだというのは雪駄のことです。チャラチャラ鳴らして歩くと魚の棚に着く。ろくじょうさんてつとおりすぎ（六条三哲通り過ぎ）、ひっちょうこえればはつくじょう（七条越えれば八九条）、じゅうじょうとうじでとどめさす（十条東寺でとどめさす）ということで、なかなかよくできているのですけれども、こういう歌が昔から今現在に至るまで歌われております。ＮＨＫの「みんなの歌」でもやっていたことがあると思います。

では、こういう通りの名を北からずっと覚えるような歌が残っているということはどういうことなのか。京都会館周辺ですと丸太町通とか、通りの名がちゃんと今は掲示してありますね。だから自分がどこら辺にいるのかというのがわかりますけれども、昔はそういうのはありませんから、覚えておかないとなかなか不便ですよね。そういうことで、振り売りの人たちなどが京中を自分の頭に入れながら商売をするために、こういう歌がだんだんとできてきたのではないでしょうか。これは推測ですが、そのように思っております。京都の通りの名というのは非常に頭に入れやすいようにできていまして、どうも日常生活

で活用されていたのではないかと思うのです。

京の七口と六地蔵

大きな道、小さな道、道についてはこういう歌で理解が深まるんですけれども、そのほかに皆さんよくお聞きになるのは京の七口という名称だと思います。京都には７つ口があったのかというと、実は７つ以上あるんです。有名なのは粟田口という三条通をずっと東へ行ったところです。粟田口吉光という刀鍛冶がいたということでも有名ですけれども、粟田口という地名があります。それから鞍馬口という地名があります。鞍馬口は鞍馬方面へ行く京都の出発点ということなんですが、現在では観光で京都へ来た方がよく鞍馬の入り口かと思って間違われるので、地下鉄でも鞍馬へ行くには何駅で降りて何に乗ってくださいとアナウンスされています。それから長坂口が西のほうにありますし、鳥羽口という地名もあります。この口を数えてみますと、京都市内には実は１０以上もあるんです。でも、なぜ七口と呼ばれたかというと、七とか八というのが非常に縁起の良い数字だから、そのように呼ばれるようになったようです。京の七口には関所を建てるなどして、そこを通る人から、人１人について幾ら、馬１頭について幾らという税金をかけたこともあります。

それから、そういう七口など、京都の出入り口の近くには地蔵が建てられていることが多いのです。有名なのは六地蔵にある地蔵ですけれども、そのほかにもいろいろ地蔵がありまして、桂にも地蔵があり、山科の四宮にも有名な徳林庵の地蔵があります。修学院のほうの山端にも地蔵が安置されていますし、深泥池にも地蔵があります。以上で５つが、今残っている地蔵なんですが、そのほかに勝軍地蔵という地蔵が大変有名だったという記録が室町時代にあります。それを含めると６ヶ所となりますけれども、実はもともとは６体ずつ地蔵がそれらの場所にあったらしいのです。地蔵はいろんな衆生の苦しみを救ってくれる仏です。病気とか、悪いことをした人でも、ちょっといいことをしていたら閻魔大王の前で裁判を受けるときに、弁明して助けてくれるということです。地獄道、餓鬼道、畜生道、阿修羅道、人間道、天道という６つの道があるんですが、それにふさわしい６体の地蔵が１カ所にまつられるというのが本来の形だったらしいのです。

６体の地蔵を１ヵ所ずつに安置するというのが本来だったのですが、６体もそろえるのは大変ということもあり、それがだんだんと廃れていって、四宮の徳林庵でも１体だけ残っているというように、現在は大体１体の地蔵が残っております。

その地蔵たちは今も申しましたように、疫病や悪い事柄から京の人たちを救うという役割を持っているわけです。地蔵以前には、塞の神という境界にまつられている神が大体その役割を果たしていたのですけれども、地蔵信仰が盛んになってきますと、その役割は地蔵へと代わっていきます。地蔵が疫病や苦しみから人々を救うという役割をするようになって、人々も地蔵を信仰するようになるわけです。疫病や、けが、貧苦など、そういうも

のに一番さらされるのは老人や子どもですので、子どもを守るという意味合いも非常に強くなってまいりまして、江戸時代以降になりますと、地蔵を巡礼する六地蔵詣でという６ヶ所の地蔵を回っていくという考え方が盛んになってきました。江戸時代の１７世紀以降ですけれども、７月２４日に６ヶ所の地蔵をぐるっと回るというのが最初の信仰形態だったのです。

ところが、それもちょっと廃れまして、地蔵盆という形になります。これは皆さんもよくご存じのように、地域の地蔵をおまつりするという考え方で、現在は７月ではなくて８月２４日ごろに行うという形になってまいりました。京都に住む人々を災いや病から守るというのが地蔵の役目とされ、この地蔵盆というのも、道の安全や、京都の京を疫病などから守ってくれる地蔵を信仰する形態ですので、道の話とだいぶ関わっているわけなんですね。

では、地蔵の話で、先ほどちょっと申しましたけれども、桂や、六地蔵や、四宮や、山端、深泥池、この５ヶ所に現在地蔵尊が存在し、もう１つ勝軍地蔵というのは、消えてしまったという話をしましたよね。そこで勝軍というのはどこにあるのだろうと少し考えてみたのです。北区の白梅町のほうに大将軍という地名があるので、そこなのかなと思ったのですけれども、どうもそうではないようです。

少し調べてみましたら、勝軍地蔵を大変信仰したのは室町時代の足利尊氏です。足利尊氏が地蔵を守護仏として、自分たちを守護してくれる仏様として大変信仰しまして、勝軍地蔵を尊びまして、等持寺というお寺に１０万体の地蔵を安置したという記録があるのです。１０万体もの地蔵だったら少しは残っているのではないかと思うのですけれども、等持院とは違いますので、今、等持寺というお寺は存在しませんし、１０万体の地蔵もないわけです。等持院は北区のほうにありますけれども、等持寺がどこにあったかという記録が残っておりまして、三条坊門万里小路にあったと記されているのです。三条坊門万里小路というのは本当に町の真ん中です。

でも、よく考えてみると、三条通をずっと東へ行きまして、東海道へ出て行く出口に当たるんじゃないでしょうか。地蔵は大体、京都とほかの世界との境界につくられますから、三条坊門の万里小路に勝軍地蔵があったということになると、東海道への入り口、出口に当たるのではないかと思うのです。等持寺は廃れまして、今はありませんが、その後、信長の時代ぐらいまでに北区の等持院の傘下に入ったという記録が残っております。こういうことで、６ヶ所を何とか探ってみると、桂に、六地蔵に、四宮に、山端に、深泥池に、あと勝軍地蔵だったのではないかと思った次第です。

京都に住む楽しさ

京都の歴史をみてきましたが、京都に住んでいると本当に楽しいですよね。大きなお寺を拝観するには、ちょっと拝観料がかかりますけれども、十分に満足を得られる立派な仏

像を持ち、すばらしいお庭を持っています。そのようなお寺が数多くある京都に住んでいると、大変いいところに住んでいると実感します。それは、そういうお寺や神社へ行くことによって気分転換がいつでもできるからです。京都は平安京をつくったときに一定の都市計画というのがあって、大内裏を中心に条坊制をつくって、邸宅をつくらせて、お寺や神社はその周辺につくらせた。だから風光明媚なところにお寺が置かれているのです。敷地がゆったりとしているということは、そういう都市計画のなせるわざかなと思う次第です。東山に特にたくさんお寺がありますけれども、夕刻になりますと、お寺の鐘が鳴り、お寺の木々も非常にたくさん酸素を出してくれるので我々の健康には大変役立っていると思いますし、また建物も非常に落ち着いた色合いで、私たちの心を和ませてくれるものだと思います。

お気に入りの道を見つけましょう

そういう大きなお寺や神社もいいのですけれども、私が今回提案したいのは、お気に入りの道を見つけましょう、あるいはお気に入りの散歩道を見つけてくださいということなんです。なるべく教えないようにしていますが、実は私の近所にもいいところがいろいろあります。曼殊院とか、詩仙堂とか、もうちょっと行きますと三宅八幡神社とか、いろんないいところがあるのですが、なるべく京都以外の人には教えないようにしています。言ってしまいましたけれども、そういうところに行っていただくのもいいですし、そのルートの途中にそれ以外の小さなお寺もあります。普通の大きなお寺は大体９時とか８時半とかに開門されて、拝観料が要るのですけれども、小さなお寺は７時ぐらいから開いていたり、夏は６時ぐらいから門を開けられていて、お寺の境内の中には石仏が安置されていたりします。ぜひお気に入りの散歩道や立ち寄り所を自分で開拓して見つけていただきたいと思っております。

ただ、女性の方に特に多いのですけれども、年をとってきますと膝が痛くなることがあります。私もちょっと右の膝が痛くなりかけているのですけれども、そうするとあんまり前のようにはスタスタ歩けないですよね。散歩友達に聞いたのですけれども、「膝が痛くなったらあんまりアップダウンの多い道を歩いたらあかんよ。」と言われました。そういえばそうかなと思って、今は山登りをするような散歩道は避けるようにして、なるべく平坦な道を歩くように工夫しております。このように、その人その人に応じた散歩道というのが自分で工夫できるのではないかなと思っているわけでございます。

ちょっと時間がありますので、先ほどのお茶の話を少し補足しておきたいのですけれども、お茶というのは私の家で言うと庭の周りの生け垣にも植えられるんですね。お茶の実を植えておきますと大きくなって、白いきれいな花も咲かせるようになりますので非常にいいものです。放っておきますと葉っぱが硬くなりますので、庭のお茶の木からお茶はできないと思うのですけれども、平安時代に最澄が薬の一環としてお茶をもたらした。その

後、鎌倉時代に栄西がお茶の種を日本へ持って来た。それが今のお茶が栄える、広く栽培されるもとになった理由なのですが、なぜ最初に九州のほうへ行って広がってしまったかということなんですね。それにもちょっと疑問を感じまして調べてみますと、栄西というのは立派なお坊さんで、何回も宋に入りまして、宋で勉強をして、宋のお寺を再建するのに日本から材木まで送ったという人です。宋からお茶の種を持って、京都へ帰ってきた時、臨済宗という禅の宗派を興すわけです。当時いろんな宗派を若い頃に渡り歩いて勉強することはわりあい普通のやり方だったので、栄西も若い頃は比叡山で勉強していたのですが、中国へ行って帰ってきますと、臨済宗を開こうと思い立ったのです。しかし、そうしますと比叡山はあんまりいい気持ちがしないのか、京都での臨済宗の布教を少し制限いたします。そのために、まず九州へ渡りまして、福岡で臨済宗のお寺をつくりました。だから最初に鎌倉時代のお茶の種も入ったということなんですね。そういえば、九州にも八女茶だとか、いろんないいお茶が栽培されているのは栄西のおかげかなと思ったりするのですけれども、京都の町の中のいろんなことをとらえて勉強していただきますと、また歩く楽しさも増すのではないかというふうに思った次第です。